【原著論文】

オリンピック競技大会におけるバスケットボール日本代表チームの強化の実際
―ローマ大会（1960）から東京大会（1964）まで―

谷釜尋徳[1)]

Actual steps to bolster Japan' s national basketball team from the 1960 Roma Olympics to the 1964 Tokyo Olympics

Hironori Tanigama[1)]

Abstract

The aim of the current study was to identify actual steps to bolster Japan' s national basketball team from the 1960 Roma Olympics to the 1964 Tokyo Olympics. Results are presented below. Japan participated in the 1960 Rome Olympics, but its team ultimately placed 15th out of 16 teams. The overriding reasons for Japan' s defeat at the Rome Olympics were not differences in height or build but were instead disparities between Japan and the West in terms of the skill level of tall athletes. Shiro Yoshii served as coach during the 1964 Tokyo Olympics. Through an analysis of scoring at the Rome Olympics, Shiro Yoshii found that Japan' s defeat was due to its low field goal percentage. While identifying potential members of Japan' s national team in 1961, Shiro Yoshii and Hiroshi Saito visited the US to inspect basketball conditions there. In 1963, Marion Crawley and Pete Newell were brought to Japan from the US. Crawley taught basic techniques while Newell taught defense. The height of Japan' s team was steadily increasing at the time, but the team was still troubled by its inability to address the pressing concern of having tall players master basic skills. In January 1964, potential members of the Japanese team were selected, and members took a expedition to the Western US and Hawaii in March. Later, the team received more intense training through games with foreign teams visiting Japan. Through joint practices with the University of California alumni team starting in the end of July, the Japanese team also gained greater confidence in its ability to perform at the 1964 Tokyo Olympics. The Japanese team' s basic strategy at the 1964 Tokyo Olympics was: to run set plays allowing a player to attempt a shot near the goal, instituting a full court press to encourage taller members of the other team to make a mistake before attempting a shot near the goal, and playing a slow tempo game. At the 1964 Tokyo Olympics, the Japanese had 4 wins and 5 losses, ranking 10th. Following the 1964 Tokyo Olympics, Shiro Yoshii had an even number of successes and failures against taller teams with the strategy Japan had used. However, he concluded that Japan would have difficulty becoming world' s top level unless players honed their skills.

Key words：1960 Roma Olympics, 1964 Tokyo Olympics, team bolstering, Shiro Yoshii
キーワード：1960ローマオリンピック，1964東京オリンピック，チーム強化，吉井四郎

1）東洋大学法学部
Faculty of Law, Toyo University

１．はじめに

本研究は，昭和39（1964）年に開催された第18回オリンピック競技大会（以下「東京五輪[注1)]」と略す）に向けたバスケットボール日本代表チームの強化の実際を時間軸に乗せて明らかにするものである．

昭和35（1960）年の第17回オリンピック競技大会（以下「ローマ五輪」と略す）に出場したバスケットボール日本代表は，16チーム中15位という惨敗を喫し，４年後の自国開催のオリンピックに向けて抜本的な改革を余儀なくされた．そこで，東京五輪の監督として白羽の矢が立ったのが吉井四郎[注2)]であった．吉井は，東京五輪の監督就任当初を「私のやったことだけは克明に記録しておくことだけは約束した.」[1)]と振り返っている．事実，吉井は東京五輪を目指して行われたチーム強化の足跡を文献において詳らかにした．吉井の手によって書き残された史料は，当時の日本代表チームの強化過程を知るための有効な手掛かりである．

ところが，従来，東京五輪に向けたバスケットボール日本代表チームの強化を取り上げた歴史的な研究は管見では存在しない．『図説バスケットボール事典』[2)]や『バスケットボールの歩み』[3)]は，東京五輪のバスケットボール競技に関して触れているが，それは当時の日本代表チームの強化の過程を詳らかにしたものではなかった．

ローマ五輪の敗戦に端を発する強化策が結実し，東京五輪では日本は10位という成績を収めた．時代性を考慮する必要はあるにせよ，本研究における東京五輪の強化活動の再構成は，今日のバスケットボールの指導現場に一定の成功事例を提供するものと考える．

本研究では，以下の構成を設定した．すなわち，ローマ五輪の模様を振り返り，これをベースとする東京五輪に向けたチーム強化の実際を時系列で詳らかにし，最後に東京五輪の日本の戦いぶりを確かめるものである．基本史料として，吉井四郎の著作をはじめ，当時代の雑誌記事や書籍等の文献史料を使用する．また，ローマ五輪から東京五輪にかけて日本代表メンバーであった元選手へのインタビューを実施し，その口述記録も文献を補完する史料として位置づけた[注3)]．関連して，当時を振り返った座談会等の回顧録も分析の対象に含めている．なお，対象期間はローマ五輪が開催された昭和35（1960）年から東京五輪本番の昭和39（1964）年までとした．

２．ローマ五輪への参加とその敗因

２－１　アジア選手権への参加と日本の欠点の発見

昭和35（1960）年１月，ローマ五輪に先立って，日本は第１回アジアバスケットボール選手権大会に出場した．結果は10チーム中，フィリピンと台湾に次ぐ３位であった．

この大会にアシスタントコーチとして帯同した吉井四郎は，日本の欠点を指摘している．すなわち，当時の日本のバスケットボール界では，技術の優劣は個人の能力に帰結する問題として扱われていたに過ぎず，効果的な技術習得法は現場でもさほど考慮されていなかったと説く[4)]．また，同大会では日本の選手が「一生懸命にプレイすることは要求されたが，如何にすることが一生懸命にプレイすることになるのかについては何も教え込まれなかった」[5)]ことを露呈したという．

吉井の眼差しは，日本が世界で勝てない要因にまでおよんでいた．当時の日本にあって，国際大会の敗因は，総じて身長を含む日本人の相対的な体格の不利に求められた[6)]．しかし，吉井は「日本がより強くなる道は，うまくなること以外にはないことを直視し，身体の劣勢という誰もが承認出来る安易な逃げ道に逃げてはならないことを強調したい.」[7)]と述べ，一歩進んだ見解を示した．当時の日本のバスケットボールに欠けていたのは技術的な要素で，身体的な差異を憂うよりも高次の技術を習得することこそ最重要課題であると吉井は捉えていたのである．

２－２　ローマ五輪に向けた方針

ここでは，昭和35（1960）年８月のローマ五輪参加にあたって，日本代表チームが打ち立てた方針を確認するものである．

ローマ五輪でコーチを務めた前田昌保は，日本の欠点はフォーメーションプレイ[注4)]に固執し過ぎるあまりにディフェンスにプレイを遮断されると対応できず，アウトサイドでのパス回しに終始してしまうところにあると受け止めていた[8)]．そこで，４つのフォーメーションプレイを準備しながらも（図１参照），これに固執せずにスクリーンプレイ[注5)]を含む２～３人の連携プレイを習得すべく練習を重ねたという．また，相手の長身選手のブロックを警戒して中距離からのシュートが重要視された[9)]．

「理に走り過ぎた消極的な日本のプレーのいき方をオリンピックにそなえ，積極的な走る強引なプレーに切り替えなければ，オリンピックで優秀な成績をあげられない」[10)]との考えから，外国勢との身長差を補う

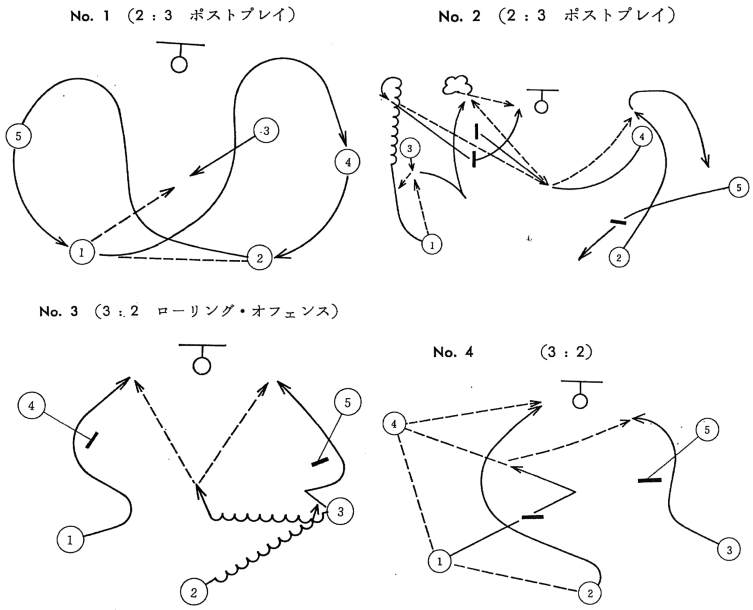

図１　ローマ五輪で採用された攻撃のフォーメーションプレイ（４種類）
前田昌保（1962）バスケットボール．日本体育協会編，第17回オリンピック競技大会報告書．日本体育協会，pp.122–123より転載．

表1　ローマ五輪バスケットボール日本代表チーム

氏名（年齢）	身長	体重	所属（出身大学）
監督　森沢　誠一（52）	167cm	63kg	日本スイステム工業（早稲田大）
コーチ　前田　昌保（48）	167cm	70kg	東邦ワラパルプ（立教大）
糸山　隆司（27）	195cm	85kg	日本鋼管（東京教育大）
杉山　武夫（27）	176cm	67kg	八幡製鉄（立教大）
斉藤　博（26）	183cm	79kg	日本鉱業（立教大）
鎌田　正司（25）	180cm	75kg	日本鋼管（早稲田大）
奈良　節雄（23）	175cm	68kg	日本鉱業（立教大）
金川　英雄（23）	182cm	76kg	八幡製鉄（立教大）
東海林　周太郎（25）	170cm	70kg	日本鉱業（立教大）
今泉　健一（26）	183cm	84kg	日本鉱業（明治大）
若林　薫（21）	178cm	71kg	東京教育大
大島　康邦（22）	175. 1cm	70kg	立教大
志賀　政司（21）	176cm	73kg	明治大
増田　貴史（19）	183cm	75kg	慶應大

前田昌保（1962）バスケットボール．日本体育協会編，第17回オリンピック競技大会報告書．日本体育協会，p.123より作成．

ために，攻撃では常に速攻を狙い，防御法として終始プレスディフェンス[注6)]を敢行することを原則とした．ただし，このスタイルは体力の消耗が激しいために，登録メンバーを２チームに分けて全員交代を繰り返すシステムが採用されている[11)]．表１はローマ五輪における日本代表チームの一覧である．

なお，昭和34（1959）年５月にオリンピックの東京招致が決まってから時間的な余裕がなかったために，ローマ五輪におけるバスケットボール日本代表は来る東京五輪を視野に入れて編成されたチームではなく，国際的なレベルで強豪国と伍していくには十分な準備はできていなかったという[12)]．

2－3　ローマ五輪への参加

昭和35（1960）年８月26日～９月８日にかけて，ローマ五輪のバスケットボール競技が行われた．表２は日本代表チームの対戦結果である．７戦全敗で16チーム中15位に沈み，その多くが大差での敗戦だったことがわかる．なお，ブルガリアが準決勝以降を棄権して16位となったため，日本の15位という成績は事実上の最下位を意味していた．

日本は速攻とオールコートのプレスディフェンスを

表２　ローマ五輪における日本代表チームの対戦結果

ゲーム種別	対戦相手	結果	スコア
予選リーグ第１戦	ハンガリー	負	日本 66－93 ハンガリー （前半 28－48／後半 38－45）
予選リーグ第２戦	アメリカ	負	日本 66－125 アメリカ （前半 36－65／後半 30－60）
予選リーグ第３戦	イタリア	負	日本 92－100 イタリア （前半 43－59／後半 49－41）
順位決定戦第１戦	フランス	負	日本 63－101 フランス （前半 35－39／後半 28－62）
順位決定戦第２戦	メキシコ	負	日本 57－76 メキシコ （前半 30－34／後半 27－42）
順位決定戦第３戦	スペイン	負	日本 64－66 スペイン （前半 34－32／後半 30－34）
順位決定戦第４戦	プエルトリコ	負	日本 73－93 プエルトリコ （前半 32－46／後半 41－47）

前田昌保（1962）バスケットボール．日本体育協会編，第17回オリンピック競技大会報告書．日本体育協会，pp.132-135より作成．

携えてゲームに臨んだが，いずれもゴール下の攻防で圧倒される結果となった．とりわけ，アメリカ戦では全125点中の100点をゴール下で失っている[13]．ローマ五輪は長身選手の活躍が際立った大会であった．だからといって，ローマ五輪で活躍したのは長身選手ばかりではない．現地で大会を視察した日本バスケットボール協会理事の植田義巳は，「長身の各チームの中にも必ず一，二名の小さくてうまいプレィヤーがいた．而も其の殆んどがリードマンでパスの中心となっていた．」[14] と報告している．また，前田も同様に，アメリカやソ連でもチームの要として「小さい選手」が活躍する姿を見て，「縦横に活躍する小さい選手の存在は，今後とも重要視こそされ欠くことのできない事を忘れてはならない．」と述べた[15]．ローマ五輪では長身選手が影響力を強めた一方で，上背のない選手も十分に存在感を発揮していたのである．

なお，五輪に合わせて開催された国際バスケットボール連盟の会議では，バスケットボール競技における身長制限について議論されているが[16]，これが実現することはなかった．

2－4　ローマ五輪の敗因と東京五輪に向けた課題

ローマ五輪で日本の指揮を執っていた前田昌保は，「今回の敗因をあらゆる角度から分析して見て，やはり決定的な原因は身長，体格の差にあるとしか考えられない．」[17] と振り返っている．また，前田は座談会の席でも，「やはりバスケットは身長だ，ということを７回の試合を通じてつくづく感じたわけです．」[18] と回顧し，敗因は身長差にあったと強調した．ローマ五輪では長身選手が活躍したため，日本が欧米の大型チームから受けたインパクトは強烈だったと推察される．ローマ五輪における日本代表チームと対戦チームとの平均身長の差異を示したものが表３である．ポジション等も考慮する必要があるが，平均の身長差はマイナス10cm 程度，最長身のアメリカと比べると16.5cm もの開きが生じていた．

しかし，五輪の敗因を身長以外の要素に求めようとする者もいた．ローマ五輪で監督を務めた森沢誠一は，最大の敗因は「我々の長身者の技術に対する認識不足にあった」[19] と指摘し，「長身者の技術」の詳細を以下のように綴っている．

表３　ローマ五輪における日本と対戦チームの平均身長の差異

日本の平均身長	対戦相手／平均身長	平均身長の差異
179.5cm	ハンガリー／190.5cm	-11.0cm
	アメリカ／196.0cm	-16.5cm
	イタリア／191.9cm	-12.4cm
	フランス／190.9cm	-11.4cm
	メキシコ／188.3cm	-8.8cm
	スペイン／183.0cm	-3.5cm
	プエルトリコ／188.4cm	-8.9cm

吉井四郎（1962）オリンピック代表チームの対戦記録より探る．バスケットボール，47：41-42より作成．

「長身者の技術とはどういうことかと云いますと，長身者は，短身者と同様にオールラウンドのプレイが出来る事と，その上に，長身の有利を極度に生かしたプレイを持つことであります．…シュートについては，シングルハンド・シュートは勿論ボースハンド・シュートも，手を上にのばした最高点より行なう事，ランニング・シュートは，リングの上から，片手或は両手でたたき込むこと．オフェンス・フォロー（オフェンスリバウンドのこと―引用者注）は，リングにボールがあたってはね返る時，両手は既にリングの両側に出ていて，はね返ったボールが手のひらのワンクッションでリングに入る．ドリブル・カットインは，足の長さを極度に利用して大きなスライドをもって，加速度がつく程フルスピードで突込む．エンドラインに沿ってドリブルでゴールの向う側に出て，たたき込むシュート力．ゴール附近にトスされたボールを，四十五度附近より突進して来て，ゴールにたたき込むプレイ等，日本では思いもよらぬプレイが数多く展開されています．」[20]

今日ではさほど驚くべき技術ではないが，この時点での日本人の目には「思いもよらぬプレイ」に映ったようである．

また，植田義己は，「背が高いから負けたのではない，大きくてうまかったのだ．これにもまして大きい敗戦の理由は，アメリカは別としても，メルボルン以来のヨーロッパ諸国の急速な進歩を知らなかったと云う事である．」[21] と言及し，森沢と同じく最大の敗因を身長差ではなく，欧米の長身者の技術に対する日本人の認識不足に求めた．

諸氏の見解を鑑みるに，ローマ五輪において身長差や体格差そのものは確かに大きな敗因ではあったが，それよりも日本と欧米の間に生じていた長身選手の技術レベルの差異が問題であったといわねばならない．

実際にローマ五輪でプレイした日本人は，帰国後に欧米勢との技術レベルの乖離を語っている．例えば，斉藤博が「日本のドリブルは，どちらかというとボールを落とすといった感じがするが，向うの選手のは，とにかくドリブルのスピードがすごい．日本の様にむだなドリブルも少ない．」[22] と回顧し，杉山武雄が「シュートについても今迄は日本人は相当高い水準にあると云われていたが決して日本の選手がそれ程高い水準にあるとは思わない．」[23] との体験談を綴ったことなどは，その好例である．

ローマ五輪の経験を踏まえて，次回の東京五輪に向けて進むべき方向性も浮き彫りになった．前田昌保は，「日本の代表チームとしては少なくとも 1 m90cm 以上の選手 3 人がまともにプレイの出来るよう教育しなければならない．そして彼らに長身者としてのプレイすなわち自分の身長を最高度に生かすプレイ，特にゴールの上のリバウンド・プレイを身につける事である．」[24] との展望を記し，東京五輪に向けてチームの大型化に意欲を示していた．

ローマ五輪に視察員として派遣されていた太田裕祥は，下記のような見解を示し，やはり長身選手が世界標準の技術を身につけることが東京五輪における日本の躍進のために必要だと睨んでいた．

「二米以上のプレイヤーが居ないために敗けた，全てはそこにあり，ともしも考えたとしたら次回東京大会はどうなるでしょう．アメリカのヴェスト，ロバートソン等は一九五以下で充分すぎる位現在のバスケットボールをこなして居る．その位の身長なれば求めて無理な求め方ではないと思うから此れ等の選手に充分にその技術を植え付ければ今回の二の舞いはしなくともすむような気がします．」[25]

以上より，ローマ五輪閉幕時点での日本の主要な課題は，代表チームの大型化と長身選手の技術水準の向上であったといえよう．

2－5　スコア分析を通して見たローマ五輪の実相

ローマ五輪の閉幕後，日本代表のスタッフを中心に大会の報告が行なわれ，この時点で欧米と日本との間に生じていた身長差や技術水準の差が詳らかにされた．しかし，これを鵜呑みにせず，別のアプローチでローマ五輪の実相に迫ろうとする人物がいた．東京五輪で日本代表チームの監督を務める吉井四郎である．

吉井は，ローマ五輪スタッフ陣による参加報告を貴重な情報源と認めながらも，「彼等の感想は，ローマに於けるゲームの感銘が余りにも強烈であったが故に，強く印象づけられたことのみの報告であって，実際のゲームそのまゝのものではなかったのではないか」[26] との疑念を抱いた．そこで，吉井が拠り所としたのが，日本が行った計 7 試合のスコアである．

スコアを分析した結果，吉井はローマ五輪の真の敗因は，フィールドゴール成功率の低さに求められると断定した[27]．フィールドゴール成功率を上げるための吉井の結論は，下記の引用に端的に示されている．

「外国のＦ・Ｓ（フィールドショットの略称．今日でいうフィールドゴールのこと．―引用者注）成功率に匹敵する成功率を挙げる為めの方法としてはシュートのやり方を工夫する以外にはないということが出来るのである．…最もシュートの入りのいゝのはゴール下であり，ゴール下に試投数の何％のシュートをすることが出来るかにその成否の鍵があったことを見れば，シュートのやり方が如何にあらねばならぬかは容易に知ることが出来るのである．…国際試合においてフォローアップシュートでゴール下の得点をより多く持つことシュート技術そのものに優れることも困難と思われる日本の現状で，この地域（ゴール付近―引用者注）でより多くの試投数を持ち，より多くの成功数を挙げ得る唯一のチャンスを作る力をより多く持つこと以外にはない，ということである．」[28]

ゴールに近いエリアで，相手の長身選手から受ける影響を極力回避してシュートできるフォーメーションプレイ[注7]を持つことが，日本が国際大会でフィールドゴールの試投数と成功率を高める唯一の方策であると吉井は説いたのである．前述したように，ローマ五輪において日本はフォーメーションプレイよりも速攻を重視して臨んだことを思えば，効果的なフォーメーションプレイの開発如何が日本の行く末を左右するとした吉井の見解は当を得ていたといえよう．

こうした，日本の伸び代としてのフォーメーションプレイを希求する吉井の考え方は，後に東京五輪のチーム強化へと繋がっていった．

３．東京五輪に向けた強化の実際

３－１　昭和35(1960)～36(1961)年における強化の実際

昭和35（1960）年，東京五輪に向けて吉井四郎が監督に就任し，国際的な視野に立った強化策の構築が試みられた．当時の心境を吉井は「正直なところ，引き受けたときには，五里霧中であった．然し，バスケットボールの神があることを信じたがゆえに，霧中の中に船出の決心がついたのである．」[29]と述懐している．吉井が最初に取り組んだのは，前述したローマ五輪のスコア分析であった．

後年吉井は，東京五輪に向けて当初立案された強化策は，「チームの大型化」「大型選手のコンバート」「大型新人の育成」「反撃を喰わないプレスディフェンス法の研究と習得」「相手の長いリーチに対しても，よりよい野投成功率をあげ得る攻撃法の研究と習得」「基礎体力の増強と，技術の熟練」であったと振り返っている[30]．吉井が理想とする「大型化」とは，チーム全体の平均身長が延伸することではなく，最大型の選手群（センター）の平均身長が体重の増加を伴って延伸することを意味していた[31]．

昭和35（1960）年12月，元ニューヨーク市立大学コーチのナット・ホルマンが来日し，日本の高校生に対する講習会を開催した．この「高校優秀選手強化練習」には，全国各地から選手60名，コーチ34名が集結している[32]．講習会の期間中，ホルマンと接する機会を得た吉井は，チーム作りにおける先決事項として最終的な「目標点」を把握する必要があること，瞬時の状況判断は練習によって習得可能であることなどを実感したという[33]．また，ホルマンは日米の技術的な差異の最たるものはシュート技術であると指摘した[34]．

昭和36（1961）年８月，日本はブルガリアで開催されたユニバーシアード大会に参加し（結果は11位），その後のヨーロッパ遠征ではフランスに２勝０敗，イタリアに０勝１敗という成績で帰国している．大会および遠征を通して，吉井がローマ五輪のスコア分析から導き出した大型チーム対策が試みられた[35]．

その後，11月８日から２ヵ月間，代表チーム編成の準備段階として，吉井四郎と斉藤博は視察目的で渡米した．吉井は，アメリカにあって日本にない技術は，ゴールに直接ボールを叩き込む「ダンキングシュート」のみだと報告している[36]．一方で，チーム戦術の面では，シャッフルオフェンス[注8]，カーテンプレー[注9]，フレアースクリーン[注10]，ブラインドカット[注11]など，当時の日本には浸透していなかったアメリカの最新動向を確認した．この見聞を通して吉井は，攻撃者同士が互いに妨害し合わない工夫がなされれば，強固なディフェンスを打ち破る攻撃法が生まれるという感触を得ている[37]．

吉井はアメリカ視察に長身選手の育成法の手掛かりを求めていたが，「長身者に対する養成として，柔軟なスピーディなプレイを練習している風景を見ることが出来なかったのである．」[38]と述懐しているように，それを目の当たりにする機会には恵まれなかった．

アメリカ視察の大きな収穫は，ローマ五輪でアメリカ代表監督を務めたピート・ニューエル[注12]との出会いであった．ニューエルの指導を約１週間見学し，そのバスケットボール観に大いに共鳴した吉井は，滞在中は斉藤とともにニューエルの自宅を何度も訪れ，バスケットボール談議を繰り返している[39-40]．これを契機に，ニューエルは日本代表チームと親密な関係を築き，東京五輪に向けた日本の強化にも尽力することに

なる．これに先立って，ローマ五輪の際に植田義巳がニューエルに接触している[41]．ニューエルと吉井の出会い，さらには日本代表コーチとしての招聘の裏側には，当時国際バスケットボール連盟の理事にも名を連ねていた植田の働きかけがあったのである．

吉井が見たニューエルのバスケットボールとは，フォーメーションプレイ[注13]の反復であった．ニューエルはバスケットボールの勝敗を左右する要因として「ミスプレイが最も影響が大きい．」と考え，それゆえミスが頻発しやすい速攻よりも，フォーメーションプレイを中心に攻撃を構成していた[42]．こうしたニューエルの考え方を吉井が踏襲することで，東京五輪に向けた攻撃方法の輪郭が形成されていく．また，「ディフェンスの神様」と称されていたニューエルからは，相互に協力し合う防御法の仕組みと，その完成に必要不可欠な「声」の重要性を学んだ[43]．

ニューエルは長身選手が攻防両面でキーマンだった時代に，アメリカの大学界で活躍した指導者である．アメリカ代表監督として指揮を執ったローマ五輪では，218cmのクレーミンを擁するソ連の高さをプレスディフェンスで封じ込めた経験を持つ[44-46]．したがって，来る東京五輪に向けて海外チームの高さの克服を命題とする日本が教えを乞うには，ニューエルは最適な人物であったといえよう．後年吉井は，東京五輪の成功はニューエルの尽力によるところが大きいとし，「日本バスケットボール界にとっては，最大の恩人」[47]と評した．

3－2　昭和37（1962）年における強化の実際

昭和37（1962）年，日本代表の候補選手を３月に招集して強化練習を行い，４月に当該年度の代表選手を決定し，以降11月20日までこのチームで強化練習を実行した．日本のバスケットボール界に「ナショナルチーム」という言葉が生まれたのはこの年のことであった[48]．東京五輪を見据えた代表チームの創生期には，選手の中に「誤ったエリート意識」があり，必ずしも好ましい練習態度ではなかったという[49]．そのため，この時期の吉井は「チームの気風刷新」を図り，「バスケットに自分の全生活を投入するよう生活指導をした」[50]と回顧している．

同年１月20～28日にかけて，ハワイからパンサーズというチームが来日し，日本代表とゲームを行った．この時，パンサーズのコーチであったケレイは，日本の欠点を３つ指摘している．１つ目は，日本の選手がゴール下の攻撃に固執し過ぎるという点であった．ケレイは，「日本のプレイヤーはスピーディによく動くし，シュートもうまい．またスクリーンも多用しているが，何でもかんでもゴール下でシュートしようとしすぎる．」[51]と述べた．ケレイの指摘を換言すれば，日本は吉井が導いた課題に沿って，ゴール付近でシュートするための有効な攻撃法の構築に取り組んでいたことが窺えよう．

２つ目の欠点は，長身者の技術力不足であった．日本の長身選手がゴール下でゴールに正対してシュートしていた様子を見たケレイは，「ディフェンス側に長身者がいたらボールを叩くことは実にたやすい．」として，当時アメリカでは必須の技術となっていたフックシュートの習得を推奨している[52]．長身選手の技術水準の向上という課題はすでにローマ五輪で浮き彫りになっていたが，この時点では大幅な改善はなされていなかったと見なければならない．

３つ目は，日本の長身選手がフィジカル面で弱く，身体の幅がないことであった．ケレイは日本の長身選手のトレーニング不足を指摘し，「たくましくない選手は実戦に不要である．」[53]と断言した．

同年，アメリカのキリスト教系大学の選抜チームであるベンチャーフォービクトリー（以下「V.F.V.」と略す）が来日し，６月21～23日にかけて日本代表チームと対戦した．V.F.V は昭和28（1953）年と昭和30（1955）年にも来日しているが，過去対戦した日本のチームは軒並み敗退している[54]．しかし，この時の日本代表チームは V.F.V. との対戦におけるはじめての勝星を挙げ，シリーズを１勝２敗で終えた．

この年，日本はジャカルタで開催されたアジア大会に参加し，７勝１敗で10チーム中２位という成績を収めた．しかし，同大会を経て，吉井は既成の大型選手のポジションコンバートには限界があると痛感し，大型新人の育成によってチームを大型化する方針への転換を決意したという[55]．

アジア大会に向けて，日本代表チームは５カ月間で130回を超える練習をこなした．しかし，前述したチーム創生期の問題もあり，吉井は「まとまったチームを作るという点から見れば全く失敗であった」[56]との自己評価を下している．だからといって，吉井はチームの方向性そのものを否定したわけではなかった．当時，吉井が「現在努力している方向にのみ，日本の勝利につながる道があり，ただ，それへの道が，より遠く，よりけわしいということが発見された」[57]と報告したように，アジア大会を通して強化の道筋はより明確になったといえよう．

アジア大会の閉幕後，日本体育協会は東京五輪に向けた強化の進捗状況を把握すべく，各競技団体に向け

て調査を実施した．当時，日本体育協会オリンピック選手強化対策副本部長であった大島鎌吉は，この年を東京五輪を見据えた強化推進において「重要な年」と位置付けていた[58]．バスケットボール競技の自己評価は，表４のように整理することができる．現場のレベルでは，当初想定されていた強化策に大幅な修正は必要ないと判断されていたことがわかる．

また，同年11月の日本体育協会主催のコーチ会議で，日本バスケットボール協会の関口荘次が当該年度の強化活動について報告している．この中で，最初に示された「よかった点」は「ナショナル・チームを編成し，常時継続強化練習ができるようになったこと」であった．従来は国際大会の直前に選手を招集して短期間でチーム作りをしていたため，当初は選手の母体チーム（企業・大学）との調整に課題を残しつつも，協会はこの体制による練習を「相当効果があったように思われる.」と評価している[59]．

この年，日本バスケットボール協会内にトレーニングドクターの制度が発足し，これを任されたのが，内科医でありながらバスケットボールの審判活動にも従事していた古川幸慶であった．選手の身長は人為的には伸ばせないという前提のもと，大型選手を集めて「なんらかの方法によって体重をふやし，力強いバスケットをやる方向にもってゆきたい」[60] と考えたところから，古川の代表チームへのトレーニング処方がはじまった．日本のバスケットボール界が欧米由来のフィジカルトレーニングに本格的に興味を持つようになったのは，およそこの頃であったといえよう[注14]．

３－３　昭和38（1963）年における強化の実際

オリンピックを前年に控えたこの年は，日本代表候補選手32名は１月に招集され，以降，選手の故障や有望新人の台頭による若干の入れ換えを含んで年末まで継続的に強化練習が行われた．角田勝次（195cm），小玉晃（196cm），諸山文彦（186cm），江川嘉孝（185cm）などが既成の大型選手に変って代表入りしている．

３月末，アメリカから新人育成や基礎技術指導に定評のあるマリオン・クローリーを招聘し，日本代表選手に対する指導が行われた．また，同年７月にはピート・ニューエルを招き，主にディフェンス面の教授を受けている．当時，日本代表チームの一員であった志賀政司によると，ニューエルの練習は２時間以上に及ぶことは稀で，全体練習後のシューティングも短時間であった[61]．ただし，同じく代表メンバーだった木内（旧姓，増田）貴史によれば，この２時間の中にはウォームアップは含まれず，ウォームアップは練習前に済ませてくるという前提のもとに練習がはじまり，その後はフリースローなどで休憩する時間は一切なかったという[62]．ディフェンスの練習として，ハンズアップやステップワークなどファンダメンタルのドリルが徹底的に行われ，連携を図るためにコミュニケーションの重要性が徹底して説かれた．また，３メンの練習では常にボールや味方を視野に入れながら全速力でプレイすることが要求され，ミス（パスミス，キャッチミス，シュートミス，ボールを床に落とす）が起こると最初からやり直しを命じられたという[63]．選手達の間では，親しみを込めて「リピート・ニューエル」というニックネームが生まれたほどである[64]．

外国人指導者の招聘に踏み切った理由を，強化対策副委員長の鹿子木健日子は，日本人のみで構成された従来の指導体制に限界を感じ「バスケットボール競技の育った土壌の違いからくる，われわれの感じていない何かをつかみ取ろうとするねらいから企図して試みたものである.」[65] と記述している．実際に，外国人指導者が来日した際には，吉井は練習のすべてを彼らに任せていた．しかし，代表チームの選手は彼らの指導をそのまま吸収していたわけではない．吉井は後に，「彼等（外国人指導者―引用者注）の技術的援助がその実効を現わすのは，それを日本人的感覚で解釈し，コーチが自分のものとして選手に教え直した後においてである」[66] と言及した．当時日本代表選手であった中村邦彦は，「ピート氏と吉井さんの，技術的な話し合いや考え方のぶつかり合いは我々も目の当たりにしました.」[67] と回顧する．ニューエルをはじめとする外国人の指導は，監督である吉井の「日本人的感覚」

表４　昭和37（1962）年度の目標についてのバスケットボール日本代表の自己評価（９月５日までの中間報告）

質問項目	回答
Ⅰ．1962年度の目標が９月５日までにどの程度到達されたか	約半分到達した
Ⅱ．第４回アジア大会について，その成績をどのように評価しているか	中程度
Ⅲ．世界選手権，その他の国際競技の成績をどのように評価しているか	12月に開催
Ⅳ．東京大会への選手強化の方針をどのように進めるか	従来通りの方針で進む
Ⅴ．現在までの選手強化の現状からおして年度別目標を修正する必要があるか	必要ない

大島鎌吉（1962）選手強化のステップ：アジア競技大会．東京オリンピック，12：４より作成．

による解釈を媒介して選手に伝えられていたのである．

５月，ブラジルで開催された世界選手権に参加するが，13チーム中最下位であった．引き続いて実施された中南米遠征では，対ウルグアイ２勝１敗，対チリ１勝１敗，対ペルー０勝２敗，対メキシコ１勝１敗，対プエルトリコ０勝１敗で終えた．しかしながら，吉井は海外の強豪との実力差を痛感しながらも，基本的な強化の方向性に誤りはないことを改めて確認している[68]．潜在能力を秘めた若手の長身選手が台頭しはじめたのは，この遠征中だったという[69]．

日本の戦いぶりを見ていた鹿子木も，積極的なディフェンスの追求やミスの少ない攻撃システムの構築などに対して，この段階での方向性に大幅な修正は必要ないと判断している．その上で，日本代表チームに臨まれる諸点として，攻撃時の臨機応変なフロアバランスの検討，シュートした選手がそのままリバウンドに入る技術の習得，ジャンプシュートの技術の習得，シュートセレクションの改善などを掲げた[70]．鹿子木は，欧米チームとの実力差について，「（欧米チームは―引用者注）大きいが故に強いのではなく，バスケットボールのチームプレーというものを，理にかなって正確にマスターしている点において，わがチームとの間に大きな開きがあったことを認めざるを得ない．」[71] と理解していたために，上記のような技術・戦術面の改善を要求したのであろう．

10月には東京で国際スポーツ大会（プレオリンピック）が開催されている．ブラジル代表チームを招いた今大会は７戦全敗に終わるが，「ゲーム運びのテンポ」が相手に負けないために重要なものであることが発見された[72]．日本は速攻を主な戦術として臨んだが，ブラジルに幾度となくカウンターを出される結果となり，吉井は「小さいから速攻でやれるというのはだめだと確信した．」[73] と後に回想している．後述のようにゲームテンポの問題は東京五輪本番でも勝敗を決する重要なポイントとなるため，この大会で得た経験は，結果とは裏腹に貴重な産物を日本にもたらしたことになる．選手間でも，当時構築していた日本代表のバスケットボールが海外の大型チーム相手でも通用するという手応えが生まれたのが，このプレオリンピックであったという[74]．

12月８日には，国内で韓国選抜チームとの親善試合が行われた．結果は，前半リードで折り返しながらも後半に逆転負けを喫した．このゲームについて報じた新聞記事によると，チームの大型化そのものは順調に進んでいたが，大型選手に基礎技術を習得させるという懸案事項をいまだに解決できず苦しんでいた模様が見て取れる[75]．

３－４　昭和39（1964）年における強化の実際

オリンピックイヤーの昭和39（1964）年，１月の全日本選手権大会終了後に東京五輪の候補者として表５のメンバーが招集された．

日本代表総監督であった牧山圭秀は，東京五輪本番の見通しとしてアメリカ，ソ連，ユーゴスラビア，ブラジル，チェコには歯が立たないが，その他の対戦には勝機があると踏んでいた[76]．目標は６位以内（入

表５　東京五輪バスケットボール日本代表チーム

氏名（年齢）	身長	体重	所属（出身大学）
監督　吉井　四郎（45）	174cm	77kg	一ツ橋大学（東京教育大）
コーチ　武富　邦中（37）	170cm	73kg	三井生命（慶應大）
奈良　節雄（27）	175cm	68kg	日本鉱業（立教大）
若林　薫（26）	179cm	73kg	日本鋼管（東京教育大）
志賀　政司（25）	175cm	74kg	日本鉱業（明治大）
中村　邦彦（25）	189cm	78kg	日本鉱業（明治学院大）
増田　貴史（24）	183cm	76kg	住友金属（慶應大）
藤江　精二（23）	191cm	82kg	三井生命（日本大）
海保　宣生（25）	168cm	68kg	住友金属（立教大）
江川　嘉孝（21）	185cm	77kg	明治大
諸山　文彦（21）	186cm	78kg	日本大
角田　勝次（20）	195cm	80kg	明治大
小玉　晃（20）	196cm	85kg	東京教育大
梅　勝夫（23）	181cm	78kg	積水化学（立教大）

吉井四郎（1965）バスケットボール．日本体育協会編，第18回オリンピック競技大会報告書．日本体育協会，pp.357-359より作成．

なお，昭和39（1964）年1月に招集された候補選手は14名であったが，このうち山本誠治（八幡製鉄・立教大卒）と岡山啓三（立教大）が故障により東京五輪本番の最終メンバーから外れている．

賞）であったが，最下位を免れれば御の字で，10位以内に入れば大成功だと世間からは評価されていたようである．

３月末より約１カ月間，日本代表チームはアメリカ西部およびハワイ遠征を敢行する．これは，最終年度の強化策として，「外国選手と肌でぶつかり合うスクリメージ（５対５のゲーム形式の練習―引用者注）の機会を数多く作り，われわれの願いとする大型化ティームへの移行を，現実のものにして行きたい」[77]との方針のもとに実施された．

帰国後，４月末にはアメリカ海軍の選抜チームであるサブパックが来日した．チームを率いたK．マツオは過去の対戦と比較して，日本はディフェンス面ではボールへの執着心，積極的なダブルチーム，スクリーンに対するファイトオーバーなどの点で「著しい進歩を遂げた」とコメントしている[78]．また，マツオは，オフェンス面ではシュート力の向上や好機を見極めて繰り出す速攻の精度が上がったことに加えて，「オフェンスの型も，かなり練習しているようですし，プレイヤー自身が型や動きを身につけているので，チームがまとまった動きをしています．」[79]と評価した．吉井がかねてから取り組んでいた攻撃の考え方がチームに浸透し，一定の成果を上げていたと推察されよう．

鹿子木健日子は，サブパックに対する日本の戦いぶりを次のように評した．オリンピックを前に，ディフェンス面での強化が進んでいたことがわかる．

> 「ディフェンスについていえば，プレイヤーの手がよく上がるようになったこと，ボールをひっかけようとする気構えが身についてきたこと，スウィッチのタイミングが，プレイヤー相互の連携動作にともないよくなって来たこと，などかなり力がついて来た．特にプレスの場合のダッシュも，カバーもよくなっており，しばしば，サブ・パックのミスを誘発したのは，その（３月末からのアメリカ遠征―引用者注）成果と考えてよい．」[80]

その後，７月はアメリカからV.F.V.が来日し，日本代表と２試合を行なった（結果は１勝１敗）．この時のV.F.V.は平均身長192cmの大型チーム編成で[81]，オリンピックを前にして海外の大型チームを想定し得る貴重な機会となった．サブパックとV.F.V.との対戦を経て，吉井はディフェンスについては「これで相当いける」[82]との感触を抱き，以降の強化の重点をオフェンス面に絞る方針を打ち出すことになる．

７月末からは，カリフォルニア大学OBチームを招聘して，東京五輪本番に向けた総仕上げの合同練習が行なわれた．この時，ピート・ニューエルとフォレスト・アンダーソンも帯同し，主にニューエルからはディフェンスの，アンダーソンからはオフェンスの指導を受けている．

ニューエルが日本と関わりを持った当初，日本の選手は欧米チームに対する体格的なコンプレックスがあったために，彼はまずもってこの点の是正が必要であると考えていた．ニューエルはカリフォルニア大学OBとの合同練習によりこれを完全に払拭できたと確信し，インタビューに対して「一九六〇年のローマ大会のチームに比較すれば，今回のチームは相当よいところ迄行くのではないか．」[83]と回答した．吉井も，後に「オリンピック時の戦力はここでほぼ完成されたといっても過言ではない．…大型プレーヤーを意識せずにプレーできるようになり，大型チームとの対戦による小型チームのもつ種々の問題は一挙に解決されたのである．」[84]と回顧し，この時の経験が有意義な総仕上げとなったことを伝えている．同様の認識を選手も共有していたようで，この合同練習は「最初から言っていた大型化への最終年度のまとめ」の意味合いがあったと木内は述懐する[85]．

８月26日より２週間，日本代表は長野県松本市で強化合宿を行なった．この合宿では，アメリカ人コーチのボビー・ウェンデルを招聘しているが，ウェンデルが作成した東京五輪対戦チームのスカウティングレポートは，日本にとって効果的な参考資料になったという[86]．現役時代はガードとして活躍したウェンデルは，吉井をはじめとする日本代表チームのメンバーに数々のアドバイスを送った．合宿中，連日の長時間におよぶ練習によって選手の疲労が蓄積することを懸念したウェンデルが，吉井に練習量を減らすようにアドバイスする一幕もあったという[87]．

４．東京五輪への参加

４－１　東京五輪の基本方針

①　オフェンスの基本方針

既述のように，吉井はローマ五輪の主な敗因をフィールドゴール成功率の差にあると特定した．この点を克服すべく当初吉井が考えたのは，日本人のクイックネスを活かした攻撃法を持つことであったという[88]．具体的には，オンボールスクリーンプレイを駆使してディフェンスを横に揺さぶりゴールにアタックする方法が想定された．こうした攻撃は，例えば日本人同志など同型選手間の攻防においてはその効果を発

揮する．しかし，チーム強化の過程において，相手が海外の大型選手になると，そのリーチの長さからゴール下でディフェンダーの守備範囲から離れてシュートするのは容易ではないことが判明した[89]．

そこで，吉井が次に考え出したのは，「空間的に相手から離れてもいいシュート・チャンスとならないとすれば，相手の体勢の逆をついてシュートするチャンスをつくらなければならない」[90] という思考から成る攻撃法であった．図２は，日本が海外の大型チーム対策として使用したフォーメーションプレイである．大型選手のリーチの脅威を解消すべく，相手を縦に揺さぶり，さらには相手の体勢の逆方向にシュートチャンスを作るためのスクリーンプレイを多用したことがコンセプトであるという[91]．

ここで，東京五輪における日本代表チームのオフェンスの実際を，インタビュー史料を通して確認したい．吉井が考案したフォーメーションプレイは，５対５の形式で繰り返し練習されたという．しかし，型にこだわり過ぎず，臨機応変に状況判断をして常にシュートチャンスをうかがうことが求められていた[92]．吉井は味方がシュートしたら必ずオフェンスリバウンドに参加することを要求した．これによって，仮にリバウンドを獲得できなくても相手の速攻を防げると考えていたからである[93]．ドリブルなしの２対２や３対３のボールキープの練習では，ディフェンスを振り切ってボールをもらうことなどの「動き」が重視されたという．日本代表のオフェンスは，２対２を基本に構成されていた．そのため，例えばガードポジションとフォワードポジション，フォワードポジションとハイポスト，コーナーとローポストなど，様々な位置の組み合わせからはじまる２対２のプレイを徹底的に練習した．吉井はオフェンス練習の際には，コーナーを埋めたり，コートを広く使うことを指導していたという．３メンの練習では，ミスが起こると最初からやり直しを命じられたが，志賀はこれによって「ミスをせずに，確実にシュートを決める」という精神を植え付けられたと回顧している[94]．

② ディフェンスの基本方針

吉井の報告によると，「相手にミスをさせ，しかも反撃をくわないディフェンスというのが，ナショナル・チームにおける防御面での最大の課題」[95] として位置づけられていた．吉井の就任当初，海外の大型チームに対して，日本はディフェンスリバウンドの獲得率があまりにも悪かったために，相手に苦しいシュートを打たせることに成功しても結局リバウンドを奪われてしまう可能性が高かった．そこで，シュートされる前に相手のミスを誘発するために，多少のリスクを背負ってでも積極的なプレスディフェンスを展開することが妥当だと判断されたのである[96]．

やがて，日本代表チームの大型化が進み，大型選手がスクリーンアウト[注15] の技術を習得するに連れて以前よりも多くのディフェンスリバウンドの獲得が見込まれるようになると，相手に苦しいシュートを打たせれば，ギャンブルをせずとも大型チームに対抗できるという理想像が浮かび上がってきた[97]．従来の日本ではスクリーンアウトが徹底されていなかったため，ニューエルは「スクリーンアウト！」という言葉を繰り返し用いてその重要性を選手に説いていたという[98]．とはいえ，ゴール下で発生する身体接触により，相手の大型選手の方が良いポジションを占有出来る可能性が高いことから，結局はプレスディフェンスが有効だと捉えられるに至る．

日本のプレスディフェンスは，主にコートの４分の３の高い位置（スリークォーター）から試行された．その狙いは相手に早いタイミングでインサイドを攻撃されないように時間をかけさせて，何度もパスやドリブルをさせてバイオレーションやターンオーバーといったミスを誘発させることにあったという．このディフェンスは１対１ではなく「１人に対して２人で守るとか，それから２人に対して３人で守るというチームディフェンス」が前提であったために，選手間

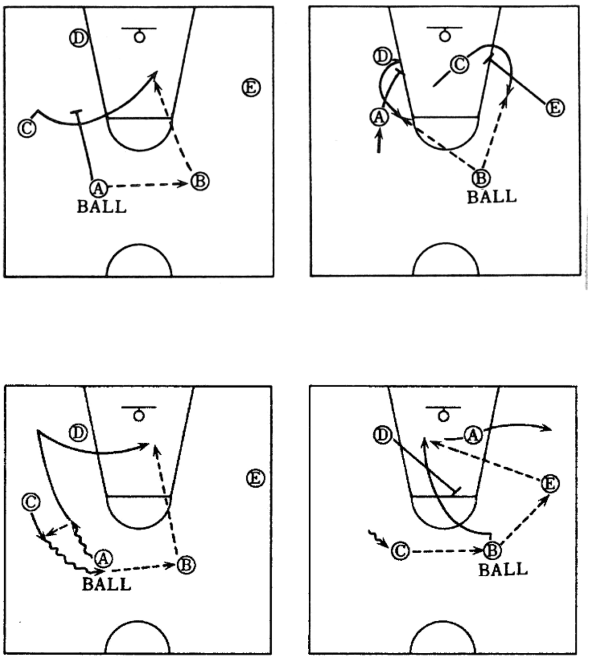

図２　東京五輪で採用された攻撃のフォーメーション
吉井四郎（1987）バスケットボール指導全書２：基本戦法による攻防．大修館書店，p.191より転載．

のコミュニケーションの重要性が強調されていた[99]．

日本のプレスディフェンスには，高さ対策の意味合いから相手に容易にシュートさせず攻撃の時間をかけさせる狙いがあった．そのため，無理にボールを奪取する発想はなく，ボールを触るだけでも十分だと考えられていたという[100]．日本にディフェンスを指導したニューエルは，プレスディフェンスの効果は相手のミスの誘発だけでなく，自チームの選手に攻防両面にわたる失敗を恐れない積極性をもたらすことにもあると説き[101]，後に「日本のナショナル・チームも，積極的な心構えになった時に最高のバスケットボールを行った.」[102] と評価した．したがって，日本のプレスディフェンスとは，高さのあるチームに対して時間を浪費させる狙いと併せて，日本の選手に積極的なプレイを促す狙いがあったと推察されよう．

日本はプレスディフェンスとしてマンツーマンとゾーンを併用した．日本代表チームのマンツーマンディフェンスは，味方がヘルプしやすいという理由でノーライン[注16] の原則が採用されている[103]．

ニューエルはディフェンスの練習としてハンズアップをはじめとするファンダメンタルやコミュニケーションを徹底したが，味方同士の連携を図るために彼が重視したのがポジショニングであった[104]．とりわけ，ボールマンの隣りのディフェンスが最重要だと指導され，ポジションとビジョンが強調された．そのため，日本代表チームの間で「ポビジョン」という造語が使用されたという．プレスディフェンスの構築に向けては，３対２や５対４など，素早いポジション移動によってアウトナンバーを守る練習が繰り返し行われた[105]．ディフェンスのポイントとしてニューエルが強調したハンズアップやコミュニケーションは従来の日本にも存在した考え方であったが，それをペナルティを課してでも徹底していく姿勢は，ニューエルが日本代表チームに植え付けたものである[106]．

吉井は，バスケットボールの技術向上のために最も重要な要素は「脚力」であり，脚力の強化はそのための特別なトレーニングを設定するよりも，バスケットボールの練習法を工夫することで十分に達成し得ると考えていた[107]．実のところ，日本の生命線であったオールコートのプレスディフェンスの練習は，選手の脚力増強を手助けし，それが技術向上のための土台構築に一役買っていたのである[108]．

③　ゲームテンポの基本方針

東京五輪の日本の基本方針として，従来の常識に変革をもたらしたのはゲームテンポの問題であった．監督の吉井が後年の座談会の席で，「ゲームのテンポが間違ったら，どんな相手だって勝てないんであって，日本がいかに勝てるゲームのテンポを維持してゲーム運びをやるかということがあるんです.」[109] と強調したように，彼はゲームテンポに並々ならぬこだわりを持っていた．当初はローマ五輪までの日本代表の傾向を踏襲して，速攻をメインとしたトランジションゲームの採用が検討されたが，それでは海外の大型チームには太刀打ちできないことが判明したという[110]．

日本が速攻をメインの戦術から除外した理由は以下の通りである．すなわち，日本が速攻を多用することは相手にも速攻の機会を相応に与えることを意味するが，日本が海外の大型のセーフティマンを前にしてゴール下まで攻め込めずにミドルシュートでフィニッシュせざるを得ない一方，日本のセーフティマンは相対的に小柄なので相手はゴール下でシュートを打ち切る公算が高い．シュート成功率がゴールまでの距離に反比例して高まるならば，速攻の応酬では自ずと海外の大型チームが優勢になる．何より，アップテンポなゲーム展開では，防御局面において動き回る相手を捕まえることが難しいために，日本の命運を託されたプレスディフェンスを多用できない[111]．こうして，最終的には「日本チームのゲーム運びのテンポは，スロー・テンポでなければならない」[112] との判断がなされ，速攻を極力控えたスローテンポなバスケットボールにシフトしていったのである．

志賀によれば，日本のスローテンポな攻撃には，攻め急いでミスをするのではなく，確実にシュートチャンスを作って得点に結びつける狙いがあったという．焦ってシュートを打って外すと，相手にリバウンドを高確率で奪われて速攻を出されてしまうため，高さ対策の意味合いからもスローテンポの採用は効果的であった．ただし，吉井が選手に対してスローテンポな攻撃を要求したことはなく，むしろシュートチャンスと判断すれば，早いタイミングでシュートしてよいと指導されていたと志賀は述懐する[113]．

木内も同様に吉井からゲームテンポの抑制を指示されたことはないとしながら，チーム全体でシュートチャンスを共有することがシュート成功率を高めるために重要だと繰り返し指導されていたことを明かし，そのような観点から「システマティックなオフェンス」が構築されたと振り返っている．「オフェンスはファストブレイクで攻めたこともありますけれども，『大事にいこう』っていう気持ちがものすごく強かったですね.」[114] と語った．したがって，吉井の思考にはスローテンポな展開が念頭にあったものの，それは

ただ単に攻撃に時間をかけることが目的ではなく，確実に得点を上げるべく最適なシュートチャンスをうかがう意図に基づいていたといえよう．

事実，ローマ五輪における日本の攻撃回数が平均98回であったのに対し，東京五輪ではこれが平均67回にまで抑えられている[115]．後述するように，東京五輪では日本のプレスディフェンスが大いに効力を発揮したことを考えれば，スローテンポなゲーム運びが日本の持ち味を活かす状況を生み出したと推察されよう．

4－2　東京五輪の戦況

昭和39（1964）年10月10日，東京五輪が開幕した．バスケットボール競技は10月11～18日にかけて実施され，日本代表チームは全９試合を戦って４勝５敗で10位という成績を収めた（表６参照）．前述したように，10位以内なら大成功という見通しからすると，日本の成績は明るい結果であったといえよう．

以下では，東京五輪における日本の全９試合の戦況を振り返っていきたい．なお，文中に記載するプレイヤーの身長は，公式プログラム[116]の情報によった．

①　プエルトリコ戦

初戦の固さがみられ，前半リードするも後半相手の長身センターを押さえ切れずに敗戦を喫した[117]．203cmのダウンズには20得点を献上している．日本は諸山が20得点とひとり気を吐いたが，190cm台の角田と小玉が５ファウルで退場した[118]．ノーマルなマンツーマンディフェンスを試行した際のキーホール[注17]の守り方が課題として浮上したゲームであった[119]．

②　ポーランド戦

前戦で課題となったキーホールのディフェンスは改善されたが，日本は後半の勝負どころでプレスディフェンスを仕掛けるも，縦のロングパスで破られ敗退する[120]．ゲームが「乱戦」になると両チームの体力差がそのまま得点差として現われることが確認され，かねてから重視していたゲームテンポの問題が改めて浮き彫りとなった[121]．ポーランドはビホフスキー（196cm）が19得点，リシコー（196cm）が14得点，ロパッカ（196cm）が20得点と長身者に得点が集中しているため[122]，日本はこのゲームでは高さを克服できなかったと見なければならない．

③　カナダ戦

日本はディフェンスリバウンドを安定して獲得し，多くの速攻を繰り出した[123]．また，プレスディフェンスを用い，スローテンポなゲーム運びを維持して待望の初勝利を手にする．プレスディフェンスの効果を再認識したゲームとなった[124]．スコア上，カナダは長身選手が目立った得点を挙げておらず[125]，日本は相手の強みを極力抑え込んだゲームを展開していたことが見て取れる．

④　ハンガリー戦

長身センターが売りのハンガリーに対し，日本は序盤からオールコートのプレスディフェンスで相手のミスを誘発し，勝利に結びつけた．ハンガリーは焦って

表６　東京五輪における日本代表チームの対戦結果

ゲーム種別	対戦相手	結果	スコア
予選リーグ第１戦	プエルトリコ	負	日本 55－65 プエルトリコ （前半 24－22／後半 31－43）
予選リーグ第２戦	ポーランド	負	日本 57－81 ポーランド （前半 27－32／後半 30－49）
予選リーグ第３戦	カナダ	勝	日本 58－37 カナダ （前半 25－16／後半 33－21）
予選リーグ第４戦	ハンガリー	勝	日本 57－41 ハンガリー （前半 24－26／後半 33－15）
予選リーグ第５戦	ソ連	負	日本 59－72 ソ連 （前半 28－33／後半 31－39）
予選リーグ第６戦	イタリア	勝	日本 72－68 イタリア （前半 32－32／後半 40－36）
予選リーグ第７戦	メキシコ	負	日本 62－64 メキシコ （前半 30－34／後半 32－30）
順位決定戦第１戦	フィンランド	勝	日本 54－45 フィンランド （前半 31－24／後半 23－21）
順位決定戦第２戦	オーストラリア	負	日本 57－64 オーストラリア （前半 29－30／後半 28－34）

オリンピック東京大会組織委員会編（1966）第十八回オリンピック競技大会公式報告書 下．オリンピック東京大会組織委員会，pp.129-184より作成．

オフェンスチャージングを犯すなど，「日本がディフェンス中心に練習した効果をまざまざと見せたゲーム」[126] だったという．対戦相手がプレスディフェンスにどのくらい手を焼くのか，すなわち相手が有する「大型プレーヤーの欠陥」の度合いが，日本の勝敗に大いに関わることが発見されたゲームであった[127]．

⑤　ソビエト戦

序盤に仕掛けたマンツーマンプレスディフェンスがソ連には通用せずに点差を離されてしまう．そこで，ゾーンプレスディフェンスに変更したところソ連のミスが相次ぎ，接戦に持ち込むことができた．しかし，最終的にはゴール下のセンターにボールを集められて劣勢となり，敗戦を喫した[128]．この試合，ソ連の218cm のクレーミンは20得点を獲得している[129]．

プレスディフェンスが成功したことや，前日の練習によるマンツーマンオフェンスの改善が奏功したことは日本にとって自信を深める結果となり[130]，この良い流れが次のイタリア戦にも波及していった．

⑥　イタリア戦

日本は終始マンツーマンプレスディフェンスを用いてイタリアを撹乱した[131]．終盤，中村，増田，諸山の主力３選手が相次いで退場したことで追い上げられるが，最終的には４点差でローマ五輪４位の強豪イタリアを退けた．

大型選手を擁するイタリアはプレスディフェンスを苦手としていたため，日本にとっては戦いやすい相手だったのである[132]．

⑦　メキシコ戦

予選リーグ最終戦の相手はメキシコであった．得点力で劣る日本が「いかに鋭く，うるさくディフェンスをして，メキシコのシュートを止めるか」が見所であったが，序盤のディフェンスの甘さが勝負の分かれ目となり，日本は僅か２点差で惜敗する[133]．前半終了間際に，メキシコ選手が自陣のゴール下から投じたボールが日本ゴールに吸い込まれるブザービーターが飛び出し，この失点が最後まで尾を引いた[134]．

メキシコには大型チーム特有の欠陥はなく，日本は身長差の劣勢を補うだけの技術を持ち得なかった．このゲームを通して吉井は，プレスディフェンスで大型選手の欠点につけ込み，スローテンポなゲーム運びで勝とうとする方法に限界を感じている[135]．攻撃回数を60回台でコントロールしたゲームのうち，日本が唯一負けたのはこのメキシコ戦であった[136]．

⑧　フィンランド戦

前線からのディフェンスが奏功してフィンランドに勝利し[137]，日本の10位以内が確定した．しかし，吉井は後年このゲームを「デフェンスの成功で勝つことが出来たが，デフェンスの威力を発揮するための，スローテンポのゲーム運びが，攻撃の積極性に若干悪影響を及ぼしつつあることが見受けられた．」[138] と回想している．スローテンポなゲーム展開を志向することの短所が見え隠れしていた．

⑨　オーストラリア戦

日本はゲームの出だしが悪く，パスミスやリバウンド後の処理の甘さを露呈し，ディフェンス面では成功を示しながらも苦しいゲーム展開を余儀なくされた[139]．増田が24得点を挙げる活躍を見せるも７点差で敗戦し，第10位で東京五輪を終える．東京五輪で日本が採った戦い方では，大型選手特有の欠陥が少ないチームには勝つことが難しいと感じられたゲームであった[140]．

このように，日本代表チームにとっての東京五輪とは，強化策による一定の成果を挙げたものの，毎回のゲームの反省点を改善して次のゲームに臨み，さらなる「世界の壁」にぶつかり新たな課題と向き合うという繰り返しであったといえよう．

４－３　東京五輪を終えての総評

バスケットボール日本代表チームは，４勝５敗で第10位という成績を収めた．東京五輪の結果を受けて，吉井はそれまでの強化の方法や成果が「すべての面においてほとんど予想通り」であったとし，「この３年間における選手強化の成果は，他のどの競技種目の成果に比しても決して劣るものではないと言い得ると思う．」と明言している[141]．また，吉井が「このような成果を挙げ得たのは決して日本のバスケットボールの一般的なレベルが向上したところに原因があったのではなく，協会が一丸となって協力して育てあげたナショナル・チームという一つのチームのみが強くなったのである．」[142] と述べたように，初の自国開催のオリンピックに向けて日本バスケットボール協会が異例の体制でバックアップしたことが，代表チームの強化を支えていたのである．

吉井は東京五輪の９試合の総評として，下記のように報告した．

> 「ゲームのやり方で，如何なる大型チームに対しても身長の不利を克服して，ほぼ対等にゲーム出来るようになったが，それで相手に勝てるのは，

相手に大型チームの欠陥があるチームに限ってであり，対等のゲームから，勝ち得るゲームにするためには，その上に技術的によりうまく，より強くならなければならないのである．ここに現在の日本のチームの勝てる限界があったのである．」[143]

プレスディフェンスを積極的に用い，ゲーム展開をスローテンポに持ち込むことで大型チームに対しても互角に勝負することができたが，さらなる技術面での成熟なくしては日本が世界の強豪と伍していくことは難しいと結論付けている．とりわけ，攻撃に関しては反省点も多く，東京五輪を振り返った文章中の「防禦面の成功に比して，みじめなものであった」「貧困な攻撃力」といった文言[144]は吉井の自己評価を物語る．

ところで，当時国際バスケットボール連盟の技術委員であったロバート・バスネルは，日本の戦いぶりを次のように称賛している．

「多くのチームからは新しいものを見い出すことは出来なかった．しかしオリンピックでは予想出来なかった出来ごとが必要なのである．最初のうち，バスケットで目新しいものへの期待はなかった．ところが，日本人達は新しい根性を見せて，敢えて危険を越える効果的な作戦を用い，これを完全に遂行して世界バスケット界の哨兵の中に地位を占めたのである．確かに巨人チームが勝利を収めたがそれでも尚，秀れて競技を遂行したのは『ニッポン人』であった．」[145]

バスネルの見解に倣えば，東京五輪に出場した大半の国が新鮮さに欠ける中で，身長に劣る日本はギャンブル性のあるプレスディフェンスに果敢にチャレンジし，世界にその存在を知らしめたと見ることができよう．ニューエルも同様に，「オリンピック東京大会では日本ティームがプレス・ディフェンスを大変効果的に使った」[146]と述べ，日本のディフェンスの出来栄えを称賛した．

5．おわりに

以下，本研究で明らかになった内容に若干の所見を交えて整理することにしたい．

ローマ五輪の敗因は，欧米勢との身長差よりも技術的な差異やフィールドゴール成功率の低さにあると分析された．東京五輪に向けて吉井四郎を監督に据えてはじまった日本代表の強化活動は，メンバーの大型化，長身選手の技術レベルの向上，攻防両面における欧米勢の高さ対策などを目指して進められた．

強化の特徴の一つは，従来のように短期間のチーム作りで国際大会に臨むのではなく，一旦編成された代表チームが若干のメンバーの入れ替えを含みながら常時継続的に活動したことである．日本バスケットボール協会は一丸となって選手の所属チームとの調整を図り，代表チームの強化に適した環境を整えていった．

また，従来の日本人に限られた指導体制を脱して，外国人指導者に積極的に協力を要請したことも注目すべきである．特に，ピート・ニューエルの招聘は東京五輪における日本の戦術に多大な影響を及ぼした．関連して，吉井や斉藤のアメリカ視察や代表チームの度重なる海外遠征，外国チームの招聘も，質量ともに異例の支援体制をして可能になったといえよう．

吉井の代表チームの強化は，国際大会や海外チームとの対戦を通して当初の方向性にいくらかの修正を加えながら進められていった．東京五輪までに多くの外国人指導者が代表チームを強化すべく訪日しているが，吉井は彼らが提供する知識を自身の「日本人的感覚」による解釈を介して選手に伝えることにこだわった．こうして，当時の日本代表選手の実情に適ったバスケットボールが構築されていったのである．

日本代表チームのバスケットボールは，ローマ五輪までの戦い方を一新して，ミスをせずに確実に得点に結びつけるオフェンス，相手に簡単にシュートさせずに時間をかけさせるプレスディフェンス，攻撃回数を抑えたスローテンポなゲーム運びが採用された．いずれも高さ対策が意識されていたが，その習得に向けてはファンダメンタルの練習も徹底されていた．

東京五輪本番，日本代表チームの成績は４勝５敗の第10位であった．日本が採った戦い方によって，海外の大型チームに対しても互角に勝負できる水準まで到達したものの，吉井はさらなる技術面での成熟なくしては日本が世界の強豪と伍していくことは難しいと結論付けた．

〈 注 〉

注１）「五輪」という言葉はオリンピックの略称である．ベルリン大会（1936）以降，国内の新聞紙上で「オリンピック」という言葉の使用頻度が高まったことにともない，文字数削減のために読売新聞記者の川本信正がこの略称を考案し，紙面で使い始めたところ，次第に定着していったという（読売新聞（1964）８月16日付．朝刊．14面）．本研究では「オリンピック競技大

会」の略称として「五輪」を用いることとし，「ローマ五輪」「東京五輪」などと表記するものである．

注２）吉井四郎（1919～92）は新潟県新潟市で生まれ，大畑小学校時代よりバスケットボールに親しんでいた．２つ年上の兄，吉井精三郎（ベルリン五輪出場）の影響を強く受け，市内および県下で３年連続優勝を達成した．小学校卒業後は兄を追って新潟商業学校に進学し，連続して日本一となる．しかし，兄の卒業後，吉井が最上級生（主将）の時には県下でも優勝できなかった．この出来事は，吉井の性格を「陽気な活動型」から「陰性な思索型」に変えたという．新潟師範学校の２部に進んだ頃には，「ゲームは，努力して勝ちとるもの」との思考に基づき，既存の技術，戦法，練習法を再検討し，その「あるべきすがた」を追求して練習に取り組むようになった．卒業後は，兄のいる東京高等師範学校に進学して活躍するが，兄が病気で戦列を離れるとチームの成績は低迷してしまう．下級生であった吉井は，チームに自分の意見を取り上げてもらうために「理論的な研究に没頭」していった（吉井四郎（1965）バスケットボールと私．新体育，35（11）：127-131）．２年時に部報に寄稿した「バスケットボール基本技術私見」では，『兵法家伝書』『五輪書』などに依拠しながら詳細な技術論を展開している（吉井四郎（1940）バスケットボール基礎技術私見．大塚学友会籠球部部報，12：40-62）．他にも，『孫氏』やクラウゼヴィッツの『戦争論』は，吉井のバスケットボール観を形成する書物となった（吉井四郎（1994）私の信じたバスケットボール．大修館書店，p.33）．学生時代の吉井は日本代表にも選出され，昭和14（1939）年の日満華交歓競技大会や翌年の東亜競技大会（1940）で活躍している（藤田修一（1977）新潟県バスケットボール史 戦前編．藤田修一，p.191）．高等師範学校卒業後，昭和17（1942）年より入隊し，ガダルカナル島，フィリピン，ビルマを転戦する．昭和21（1946）年に復員すると，翌年の全日本選手権では新潟倶楽部の一員として優勝に貢献した．昭和22（1947）年，新潟高等女学校で指導者生活をスタートし，昭和25（1950）年からの約10年間は東京教育大学の監督を務めた．

注３）本研究でインタビュー調査の対象としたのは，志賀政司氏である．志賀氏は明治大学在学中にローマ五輪に出場し，卒業後は日本鉱業でプレイした．もう一人の人物は木内（旧姓増田）貴史氏である．木内氏も慶応義塾大学在学中にローマ五輪の日本代表に選出されている．卒業後は住友金属で活躍した．両氏とも東京五輪に向けて吉井四郎監督のもとに結成された日本代表チームにも当初より選出され，この期間における強化活動の実際や東京五輪本番の様子を熟知している．なお，インタビュー調査の方法や得られた情報の活用法については，主に御厨（御厨貴（2002）オーラル・ヒストリー．中央公論新社．），Skillen ら（Skillen, F. and Osborne, C.（2015）It's good to talk: Oral history, sports history and heritage. Int. J. Hist Sport., 32（15）: 1883-1898）の文献から示唆を得た．

注４）吉井の文献では，「フォーメーション」は「図の上に協力のしかたがかけるもの．」（吉井四郎（1967）バスケットボール．旺文社，p.251）を意味した．
前田は，フォーメーションプレイについて次の見解を示している．
「従来のフォーメーションプレーは，ゴールの近くにボールを進めるのがその目的のすべてであったが，今後のプレーは，中距離シュートをするためのフォーメーションのいくつかが組み立てられなければならない．」（前田昌保（1959）積極的なプレーへの移行．バレーボール＆バスケットボール，１（４）：46）

注５）スクリーンプレイは，吉井によって「１人または数人の攻撃者が，他の１人の攻撃者のためにスクリーンを形成し，それを利用してマークをはずそうとする方法．」（吉井四郎（1967）バスケットボール．旺文社，p.250）と説明されている．

注６）プレスディフェンスは，吉井によれば「相手に接近して防御する方法．」（同上，p.251）を意味した．ただし，前田が念頭に置いたのはマンツーマンで行う「プレス気味のスウィッチディフェンス」（前田昌保（1959）積極的なプレーへの移行．バレーボール＆バスケットボール，１（４）：46）のことであった．

注７）吉井はローマ五輪以前の段階で次のような見解を示している．
「フォーメーションプレーは，そこに，協力のしかたの約束があるがために，５人の総和以上の力を期待できる反面，そこに，再現しようとする型がある故に，対策をたてられ，その偉力を減殺される可能性をも持つものである．フリーオフェンスは，各個人の臨機の判断によるプレーの連続であるが，そこには再現しようとする型がない．常に，５人の総和以上の力を期待できないのみか，それ以下に終る可能性さえ考えられる．」（吉井四郎（1959）基礎技術の再検討．バレーボール＆バスケットボール，１（４）：46）
上記引用より，この頃の吉井はすでに「５人の総和以上の力」を発揮し得るフォーメーションプレイに活路を見出していたと推察されよう．

注８）シャッフルオフェンスとは，「片側のサイドからポストマンをスクリーナーとしたスクリーンプレイで攻撃が始まり，一連の攻撃が終った時には，反対側のサイドで同じスターティングポジションができあがっており，逆サイド方向から同じように攻撃を始めるコンテュニュティーオフェンス．」（小谷究・小野秀二監（2017）バスケットボール用語事典．廣済堂出版，p.62）を指す．

注９）カーテンプレー（カーテンスクリーン）とは，「複数のスクリーナーが横に並んでセットする形態のスクリーン．」（同上，p.37）を指す．

注10）フレアースクリーンとは，「スクリーナーがユーザーをある位置からコーナー方向へボールから離すようにセットするオフボールスクリーン．」（同上，p.170）を指す．

注11）ブラインドカット（ブラインドサイドカット）とは，「オフボールマンが，自身のマークマンの両脇のうち，ボールマンと反対側を通ってゴールに向かうカット．」（同上，p.163）を指す．

注12）ピート・ニューエル（1915～2008）はカナダのバンクーバーで生まれ，アメリカのロサンゼルスで育った．

ロヨラ大学でプレイし，海軍での兵役を終えてサンフランスシコ大学のヘッドコーチに就任する（1946）．その後，ミシガン州立大学（1950～52），カリフォルニア大学バークレー校（1954～60）のヘッドコーチとして活躍した．全米大学招待選手権大会（1949），NCAA 選手権大会（1959），ローマ五輪（1960）の３大ビッグタイトルを獲得している．ローマ五輪後は現場を離れ，カリフォルニア大学バークレー校の体育局長に転身した．この時期より日本代表チームとの関係性を深め，東京五輪をはじめ日本のバスケットボール界に多大な影響を及ぼしている．その貢献により，昭和62（1987）年には勲四等瑞宝章を受章した（Jenkins, B.（1999）A good man: The Pete Newell story. University of Nebraska press.; Newell, P.（2001）Pete Newell' s defensive basketball. Coaches choice, p.119；水谷豊（2012）ラプチック賞を受賞した故ニューエル氏が日本に残した大きな足跡．月刊バスケットボール，40（12）：166–167）．

注13）ただし，ニューエルは同時代の著作において，フォーメーションプレイではなくそれとほぼ同義に“set offense”という言葉を使用している（Newell, P. and Benington, J.（1962）Basketball methods. Ronald press）．

注14）その後の経過を辿ると，技術習得の練習に多くの時間を割かねばならず，体力面での強化は後回しになり，東京五輪本番でも当初意図したような「力強いバスケット」は実現しなかった．また，監督の吉井が，フィジカルトレーニングとバスケットボールの技術向上との相関関係に最終的に疑念を抱いたように（吉井四郎（1966）東京オリンピック 日本バスケットボールティームの選手強化および対戦スコアーの実態報告とその検討について（その１）．一橋大学研究年報 自然科学研究，８：96），強化最終年をむかえても当事者がその効力を実感するまでには至らなかったのである．

注15）吉井はスクリーンアウトについて，「フォローしようとする攻撃者を，そのスタートする位置でブロックし，リバウンドするボールを獲得しようという方法である．つまり，ボールにとびついてボールを獲得するというよりは，ボールのリバウンドする地域を獲得してボールを獲得するという方法である．」（吉井四郎（1967）バスケットボール．旺文社，p.168）と解説している．

注16）ノーラインとは，「ディフェンスプレイヤーが，ボールマンにベースラインドライブをされないようにボールマンをミドルライン方向に向かわせることを強調すること．」（小谷究・小野秀二監（2017）バスケットボール用語事典．廣済堂出版，p.130）を指す．

注17）キーホールとは，今日でいうペイントエリアを指し，「古い規則のフリー・スロー・サークルとフリー・スロー・レーンとあわせた形が鍵穴に似ていたのでこの名前がついた．」（櫻井榮七郎編（1998）球技用語事典．不昧堂出版，p.124）とされている．

〈文　献〉

１）吉井四郎・植田義巳・森沢誠一・畑龍雄・鈴木正三・古川幸慶・大室富弥・渡辺直吉（1981）座談会 東京オリンピック．日本バスケットボール協会編，バスケットボールの歩み：日本バスケットボール協会50年史．日本バスケットボール協会，pp.202–203.

２）牧山圭秀（1969）競技の歴史．牧山圭秀・吉井四郎・畑竜雄編，図説バスケットボール事典．講談社，pp.23–26.

３）日本バスケットボール協会広報部会編（1981）バスケットボールの歩み：日本バスケットボール協会50年史．日本バスケットボール協会，pp.199–205.

４）吉井四郎（1960）感じを分析する．バスケットボール，43：15.

５）同上：15.

６）武山栄雄（1959）10名によるセット・プレーの完成．バレーボール＆バスケットボール，１（４）：43.

７）吉井四郎（1960）感じを分析する．バスケットボール，43：17.

８）前田昌保（1962）バスケットボール．日本体育協会編，第17回オリンピック競技大会報告書．日本体育協会，p.122.

９）同上，p.122.

10）前田昌保（1959）積極的なプレーへの移行．バレーボール＆バスケットボール，１（４）：45.

11）前田昌保（1962）バスケットボール．日本体育協会編，第17回オリンピック競技大会報告書．日本体育協会，p.123.

12）木内貴史（2018）木内氏に対するインタビュー調査記録（インタビュアーは筆者）．平成30年３月26日11時—12時30分，東京都港区新橋 JR 新橋駅前にて実施．

13）前田昌保（1962）バスケットボール．日本体育協会編，第17回オリンピック競技大会報告書．日本体育協会，p.127.

14）植田義己（1961）ローマオリンピック雑感．バスケットボール，47：28.

15）前田昌保（1962）バスケットボール．日本体育協会編，第17回オリンピック競技大会報告書．日本体育協会，p.126

16）植田義己（1961）第六回 FIBA 世界会議に出席して．バスケットボール，47：38–40.

17）前田昌保（1962）バスケットボール．日本体育協会編，第17回オリンピック競技大会報告書．日本体育協会，p.130.

18）前田昌保・笠原茂・赤樫卓爾・田端政治・大島鎌吉・加藤橘夫・猪飼道夫・中原乾二（1960）ローマから東京へ（座談会）．OLYMPIA，１（３）：50.

19）森沢誠一（1961）ローマオリンピック帰国挨拶．バスケットボール，47：３.

20）同上：３–４.

21）植田義己（1961）第六回 FIBA 世界会議に出席して．バスケットボール，47：27.

22）斉藤博・森沢誠一・前田昌保・今泉健一・奈良節雄・植田義巳（1961）座談会 ローマ・オリンピックを顧りみて．バスケットボール，47：23.

23）杉山武雄（1961）ローマオリンピックに参加して．バスケットボール，47：16.
24）前田昌保（1962）バスケットボール．日本体育協会編，第17回オリンピック競技大会報告書．日本体育協会，p.130.
25）太田裕祥（1961）ローマ大会雑感．バスケットボール，47：33.
26）吉井四郎（1961）オリンピック代表チームの対戦記録より探る．バスケットボール，47：42.
27）同上：53.
28）同上：56–57.
29）吉井四郎（1965）バスケットボールと私．新体育，35（11）：131.
30）吉井四郎（1966）東京オリンピック 日本バスケットボールティームの選手強化および対戦スコアーの実態報告とその検討について（その１）．一橋大学研究年報 自然科学研究，８：83.
31）同上：89–91.
32）吉井四郎（1965）バスケットボール．日本体育協会編，東京オリンピック選手強化対策本部報告書．日本体育協会，p.325.
33）吉井四郎（1961）バスケットボール：ナット・ホルマン・コーチを招いて．OLYMPIA，２（４）：46–47.
34）吉井四郎（1961）バスケットボール：ナット・ホルマン・コーチを招いて．OLYMPIA，２（４）：46.
35）吉井四郎（1965）バスケットボール．日本体育協会編，東京オリンピック選手強化対策本部報告書．日本体育協会，p.327.
36）吉井四郎・斉藤博（1962）この目で見たアメリカのバスケットボール．バスケットボール，52：１.
37）吉井四郎（1962）アメリカのバスケットボールから得たヒントについて．OLYMPIA，３（２）：51.
38）吉井四郎・斉藤博（1962）この目で見たアメリカのバスケットボール．バスケットボール，52：11.
39）吉井四郎（1977）バスケットボールのコーチング：基礎技術編．大修館書店，p.５.
40）笠原成元監，バスケットボールの神を信じた男：吉井四郎特集 第一巻（VHS）．ジャパンライム.
41）日本バスケットボール協会広報部会編（1981）バスケットボールの歩み：日本バスケットボール協会50年史．日本バスケットボール協会，pp.200–201.
42）吉井四郎・斉藤博（1962）この目で見たアメリカのバスケットボール．バスケットボール，52：３.
43）同上：７.
44）Cunningham, C.（2009）American hoops: U.S. men's Olympic basketball from Berlin to Beijing. University of Nebraska press, pp.144–145.
45）Jenkins, B.（1999）A good man: The Pete Newell story. University of Nebraska press, p.204.
46）Williams, D.（2010）Great moments in Olympic basketball. Sports zone, pp.23–24.
47）吉井四郎（1977）バスケットボールのコーチング：基礎技術編．大修館書店，p.５.
48）木内貴史（2018）木内氏に対するインタビュー調査記録（インタビュアーは筆者）．平成30年３月26日11時―12時30分，東京都港区新橋 JR 新橋駅前にて実施.
49）吉井四郎（1966）バスケットボール．日本体育協会編，第４回アジア競技大会報告書．日本体育協会，p.49.
50）吉井四郎（1968）男子バスケットボール．日本体育協会編，1967夏季1968冬季ユニバーシアード大会報告書．日本体育協会，p.134.
51）植田義己（1962）ハワイ・コーチ ケレイ氏の観た日本チーム．バスケットボール，52：41.
52）同上：42.
53）同上：42.
54）編集委員会（1964）V.F.V がやってきた．バスケットボール，64：24.
55）吉井四郎（1965）バスケットボール．日本体育協会編，東京オリンピック選手強化対策本部報告書．日本体育協会，pp.327–328.
56）吉井四郎（1966）バスケットボール．日本体育協会編，第４回アジア競技大会報告書．日本体育協会，p.48.
57）吉井四郎（1962）バスケットボール．OLYMPIA，３（５）：58.
58）大島鎌吉（1962）選手強化のステップ：アジア競技大会．東京オリンピック，12：３.
59）関口荘次（1962）今年度選手強化の反省．OLYMPIA，３（６）：27.
60）古川幸慶（1965）バスケットボール．日本体育協会編，東京オリンピックスポーツ科学研究報告．日本体育協会，p.245.
61）志賀政司（2018）志賀氏に対するインタビュー調査記録（インタビュアーは筆者）．平成30年１月23日13―15時，埼玉県さいたま市南区 JR 浦和駅前にて実施.
62）木内貴史（2018）木内氏に対するインタビュー調査記録（インタビュアーは筆者）．平成30年３月26日11時―12時30分，東京都港区新橋 JR 新橋駅前にて実施.
63）志賀政司（2018）志賀氏に対するインタビュー調査記録（インタビュアーは筆者）．平成30年１月23日13―15時，埼玉県さいたま市南区 JR 浦和駅前にて実施.
64）木内貴史（2018）木内氏に対するインタビュー調査記録（インタビュアーは筆者）．平成30年３月26日11時―12時30分，東京都港区新橋 JR 新橋駅前にて実施.
65）鹿子木健日子（1963）鋭い感覚を養成．東京オリンピック，16：７.
66）吉井四郎（1968）男子バスケットボール．日本体育協会編，1967夏季1968冬季ユニバーシアード大会報告書．日本体育協会，p.138.
67）中村邦彦・若林薫・海保宣生・木内貴史・諸山文彦・手嶋昇・従野明宏・上谷富彦・桑原信・深尾秀次・島本和彦（2005）座談会 東京オリンピックヘッドコーチ 指導者，故吉井四郎氏の足跡 その３．バスケットボールプラザ，28：10.
68）吉井四郎（1965）バスケットボール．日本体育協会編，東京オリンピック選手強化対策本部報告書．日本体育協会，p.328.
69）木内貴史（2018）木内氏に対するインタビュー調査記録（インタビュアーは筆者）．平成30年３月26日11時―12時30分，東京都港区新橋 JR 新橋駅前にて実施.
70）鹿子木健日子（1963）鋭い感覚を養成．東京オリンピック，16：７.
71）同上：８－９.

72）吉井四郎（1965）バスケットボール．日本体育協会編，東京オリンピック選手強化対策本部報告書．日本体育協会，p.328.
73）吉井四郎・植田義巳・森沢誠一・畑龍雄・鈴木正三・古川幸慶・大室富弥・渡辺直吉（1981）座談会 東京オリンピック．日本バスケットボール協会編，バスケットボールの歩み：日本バスケットボール協会50年史．日本バスケットボール協会，p.201.
74）木内貴史（2018）木内氏に対するインタビュー調査記録（インタビュアーは筆者）．平成30年３月26日11時―12時30分，東京都港区新橋 JR 新橋駅前にて実施.
75）読売新聞（1963）12月20日付．朝刊．９面.
76）牧山圭秀（1964）東京大会への見通しはどうか：石に嚙りついてもベスト６へ．東京オリンピック，24：６.
77）武富邦中（1964）米国遠征報告．バスケットボール，62：19.
78）マツオ（1964）日本チームによせて．バスケットボール，62：２.
79）同上：２.
80）鹿子木健日子（1964）サブバックチームについて．バスケットボール，62：４－５.
81）編集委員会（1964）V.F.V がやってきた．バスケットボール，64：25.
82）吉井四郎（1965）バスケットボール．日本体育協会編，東京オリンピック選手強化対策本部報告書．日本体育協会，p.328.
83）編集委員会（1964）アメリカよりコーチを招く．バスケットボール，64：22–23.
84）吉井四郎（1965）バスケットボール．日本体育協会編，東京オリンピック選手強化対策本部報告書．日本体育協会，pp.328–329.
85）木内貴史（2018）木内氏に対するインタビュー調査記録（インタビュアーは筆者）．平成30年３月26日11時―12時30分，東京都港区新橋 JR 新橋駅前にて実施.
86）吉井四郎（1965）バスケットボール．日本体育協会編，東京オリンピック選手強化対策本部報告書．日本体育協会，p.327.
87）木内貴史（2018）木内氏に対するインタビュー調査記録（インタビュアーは筆者）．平成30年３月26日11時―12時30分，東京都港区新橋 JR 新橋駅前にて実施.
88）吉井四郎（1965）バスケットボール．日本体育協会編，東京オリンピック選手強化対策本部報告書．日本体育協会，p.332.
89）吉井四郎（1987）バスケットボール指導全書２：基本戦法による攻防．大修館書店，pp.190–191.
90）吉井四郎（1965）バスケットボール．日本体育協会編，東京オリンピック選手強化対策本部報告書．日本体育協会，p.332.
91）吉井四郎（1987）バスケットボール指導全書２：基本戦法による攻防．大修館書店，p.191.
92）志賀政司（2018）志賀氏に対するインタビュー調査記録（インタビュアーは筆者）．平成30年１月23日13―15時，埼玉県さいたま市南区 JR 浦和駅前にて実施.
93）木内貴史（2018）木内氏に対するインタビュー調査記録（インタビュアーは筆者）．平成30年３月26日11時―12時30分，東京都港区新橋 JR 新橋駅前にて実施.
94）志賀政司（2018）志賀氏に対するインタビュー調査記録（インタビュアーは筆者）．平成30年１月23日13―15時，埼玉県さいたま市南区 JR 浦和駅前にて実施.
95）吉井四郎（1965）バスケットボール．日本体育協会編，東京オリンピック選手強化対策本部報告書．日本体育協会，p.331.
96）同上，p.331.
97）同上，p.332.
98）木内貴史（2018）木内氏に対するインタビュー調査記録（インタビュアーは筆者）．平成30年３月26日11時―12時30分，東京都港区新橋 JR 新橋駅前にて実施.
99）同上.
100）志賀政司（2018）志賀氏に対するインタビュー調査記録（インタビュアーは筆者）．平成30年１月23日13―15時，埼玉県さいたま市南区 JR 浦和駅前にて実施.
101）Newell, P. and Benington, J.（1962）Basketball methods. Ronald press, pp.300–301.
102）ニューエル（1968）PETE NEWELL 技術解説：プレス・ディフェンス．月刊バスケットボール イラストレイテッド，２（４）：27.
103）牧山圭秀（1972）バスケットボールの技術史．岸野雄三・多和健雄編，スポーツの技術史．大修館書店，p.394.
104）中村邦彦・若林薫・海保宣生・木内貴史・諸山文彦・手嶋昇・従野明宏・上谷富彦・桑原信・深尾秀次・島本和彦（2005）座談会 東京オリンピックヘッドコーチ 指導者，故吉井四郎氏の足跡 その３．バスケットボールプラザ，28：12.
105）志賀政司（2018）志賀氏に対するインタビュー調査記録（インタビュアーは筆者）．平成30年１月23日13―15時，埼玉県さいたま市南区 JR 浦和駅前にて実施.
106）木内貴史（2018）木内氏に対するインタビュー調査記録（インタビュアーは筆者）．平成30年３月26日11時―12時30分，東京都港区新橋 JR 新橋駅前にて実施.
107）吉井四郎（1966）東京オリンピック 日本バスケットボールティームの選手強化および対戦スコアーの実態報告とその検討について（その１）．一橋大学研究年報 自然科学研究，８：110.
108）同上：110.
109）吉井四郎・植田義巳・森沢誠一・畑龍雄・鈴木正三・古川幸慶・大室富弥・渡辺直吉（1981）座談会 東京オリンピック．日本バスケットボール協会編，バスケットボールの歩み：日本バスケットボール協会50年史．日本バスケットボール協会，p.203.
110）吉井四郎（1965）バスケットボール．日本体育協会編，東京オリンピック選手強化対策本部報告書．日本体育協会，p.333.
111）同上，pp.333–334.
112）吉井四郎（1969）スポーツ作戦講座１ バスケットボール．不昧堂出版，p.232.
113）志賀政司（2018）志賀氏に対するインタビュー調査記録（インタビュアーは筆者）．平成30年１月23日13―15時，埼玉県さいたま市南区 JR 浦和駅前にて実施.
114）木内貴史（2018）木内氏に対するインタビュー調査記録（インタビュアーは筆者）．平成30年３月26日11時―12時30分，東京都港区新橋 JR 新橋駅前にて実施.

115）吉井四郎（1965）バスケットボール．日本体育協会編，東京オリンピック選手強化対策本部報告書．日本体育協会，p.333.
116）オリンピック東京大会組織委員会編（1964）第18回オリンピック東京大会 バスケットボールプログラム．オリンピック東京大会組織委員会，pp.16–23.
117）編集委員会（1964）オリンピックの足跡 バスケットボール．バスケットボール，65：10.
118）オリンピック東京大会組織委員会編（1966）第十八回オリンピック競技大会公式報告書 下．オリンピック東京大会組織委員会，pp.134–135.
119）吉井四郎（1965）バスケットボール．日本体育協会編，第18回オリンピック競技大会報告書．日本体育協会，p.159.
120）編集委員会（1964）オリンピックの足跡 バスケットボール．バスケットボール，65：11.
121）吉井四郎（1965）バスケットボール．日本体育協会編，第18回オリンピック競技大会報告書．日本体育協会，p.159.
122）オリンピック東京大会組織委員会編（1966）第十八回オリンピック競技大会公式報告書 下．オリンピック東京大会組織委員会，pp.134–135.
123）編集委員会（1964）オリンピックの足跡 バスケットボール．バスケットボール，65：12.
124）吉井四郎（1965）バスケットボール．日本体育協会編，第18回オリンピック競技大会報告書．日本体育協会，p. 159.
125）オリンピック東京大会組織委員会編（1966）第十八回オリンピック競技大会公式報告書 下．オリンピック東京大会組織委員会，pp.146–147.
126）編集委員会（1964）オリンピックの足跡 バスケットボール．バスケットボール，65：13.
127）吉井四郎（1965）バスケットボール．日本体育協会編，第18回オリンピック競技大会報告書．日本体育協会，p. 159.
128）編集委員会（1964）オリンピックの足跡 バスケットボール．バスケットボール，65：14–15.
129）オリンピック東京大会組織委員会編（1966）第十八回オリンピック競技大会公式報告書 下．オリンピック東京大会組織委員会，pp.156–157.
130）吉井四郎（1965）バスケットボール．日本体育協会編，第18回オリンピック競技大会報告書．日本体育協会，pp.159–160.
131）編集委員会（1964）オリンピックの足跡 バスケットボール．バスケットボール，65：16.
132）吉井四郎（1965）バスケットボール．日本体育協会編，第18回オリンピック競技大会報告書．日本体育協会，p. 160.
133）編集委員会（1964）オリンピックの足跡 バスケットボール．バスケットボール，65：18.
134）牧山圭秀（1969）競技の歴史．牧山圭秀・吉井四郎・畑竜雄編，図説バスケットボール事典．講談社，p.26.
135）吉井四郎（1965）バスケットボール．日本体育協会編，第18回オリンピック競技大会報告書．日本体育協会，p. 160.
136）吉井四郎（1969）スポーツ作戦講座１ バスケットボール．不昧堂出版，p.233
137）編集委員会（1964）オリンピックの足跡 バスケットボール．バスケットボール，65：22.
138）吉井四郎（1965）バスケットボール．日本体育協会編，第18回オリンピック競技大会報告書．日本体育協会，p. 160.
139）編集委員会（1964）オリンピックの足跡 バスケットボール．バスケットボール，65：25.
140）吉井四郎（1965）バスケットボール．日本体育協会編，東京オリンピック選手強化対策本部報告書．日本体育協会，p.325.
141）同上，p.325.
142）吉井四郎（1968）男子バスケットボール．日本体育協会編，1967夏季1968冬季ユニバーシアード大会報告書．日本体育協会，p.132.
143）吉井四郎（1965）バスケットボール．日本体育協会編，第18回オリンピック競技大会報告書．日本体育協会，161.
144）吉井四郎（1965）われわれはこう戦った バスケットボール．新体育，35（１）：94.
145）バスネル（1964）オリンピックに観た日本．バスケットボール，65：42.
146）ニューエル（1968）PETE NEWELL 技術解説 プレス・ディフェンス．月刊バスケットボール イラストレイテッド，２（４）：26.

（2018年５月４日受付
2018年６月６日受理）